

公共の担い手

# NPO法人 ちば里山センター



NPO法人ちば里山センター 理事長 **金親 博榮**

## 1. ちば里山センターの発足と運営

2003年第54回全国植樹祭の千葉県での開催を契機として施行された「千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例」（里山条例）にある県民参加の元に、里山の持つ多面的な機能を発揮するため、県内の里山活動団体の連合体として、当センターは2004年に発足しました。

この「里山」とは、田舎を構成する森林、田、畑、沼地、集落などの景観を含む広い意味での「農山村の生活に関する環境全体」を包含するものです。

会員数は、当初の18団体から2016年には95団体と増加し、会員の所在地も全県に広がり、任意団体、NPOに加え、企業、業界団体なども加入し、現在の形となりました。

活動内容の拡大に伴い、契約行為、助成金や寄付金の取得、資金の確保等に対して、法人格の必要性が生じ、2010年には非特定営利活動法人に衣替えしました。この間、千葉県の予算、人事面での関与は薄れ、自立化の流れの中で、現在では、個々の県民がボランティアとして、各種の補助金などを得て、県市行政の一端を担う組織として運営しています。

この一連の、里山に関する施策は、全国でのさきがけとなり、千葉県行政の成果として注目され、国内外からの視察団を多数受け入れています。

## 2. ちば里山センターの事業

一方では、十分な産業政策を描けない林業、

環境行政を下支えし、県民ぐるみの、環境や生物多様性への意識を醸成する視点から、持続可能なライフスタイルへの転換、地域活性化などにも、意を配る活動に取り組んでいます。

- 「里山ワンストップサービス」は、森林所有者や県民など、里山に関する何でも相談の窓口として、「里山情報バンク」は、利用して欲しい里山の候補地情報をHPで公表し、里山の保全活用と楽しみの場を探す県民を結びつける事業です。「ちば里山新聞」の発行、「安全講習会」は里山活動の参加者の掘り起こし、知識、技術レベルの向上のため、毎年4回程度を開催しています。
- 「ちば里山カレッジ」では、「ボランティア養成コース」を28日間「次世代リーダー養成コース」を15日間、「フォローアップ研修」を4日間を開設し、県下25市からの応募者を得て、延べ47日のカリキュラムを編成し、3年間で、



樹木伐採、チェーンソーの安全講習

238名の卒業生を輩出し、各市での里山活動で活躍する人材源となっています。

- 「里山シンポジウム」の13年間にわたる開催  
県下12市で、各市の支援をえて、13回開催し、「里山に託す私たちの未来」を共通テーマとして、毎年多数の分科会と全体会を同時期に開催しています。このうち八千代、千葉、いすみ、市原、君津、山武、南房総等では、シンポジウムを契機として、市を中心とした里山活動団体のネットワーク化が促進され、現在拡大中という成果を得ています。

### 3. ボランティア活動の問題点

社会的な課題への対処を、無償の労働を投入して解決に当たる「ボランティア活動」を、「できる人が、出来る時に、出来るだけ」を合言葉に、進めています。その欠点は、若年層、稼ぎ手の年代の参加が、容易ではないと言う事です。この状況の改善は難しく、年配者ばかりのボランティア団体が増え、資金不足と並んで、後継者不足が、大きな課題となっています。

### 4. 林業の再生につながる里山活動

山林は、国土の2/3、県土の1/3を占める、突出して大きな自然資源であり、生存環境です。

一般の市民の距離を縮めるためにも、広く県民を、里山に招き入れ、次に、保全活動を体験し、これを楽しみ場所として利用する事で、住民の地に足のついた活性化が始まると考えます。

より多くの県民が、里山への理解を深め、大切さや楽しさを知る事は、森林・林業の広い意味でのサポーターになる事が期待されます。業界内部での、自助努力はもとより、この推進のための森林環境税の実現も、千葉県にとっての課題です。

### 5. 国際化と地方自治

ボーダーレス化による、物資の自由な移動

は、コスト優先の生産を追い求める事となり、生産場所を選ばない農林業は、市場原理に、追いやられていきます。全国の林業生産額は、全体で4,500億円、きのこなどの林産物と木材が、半々です。産業部門としての林業は、額では、消滅同然となっています。

荒れる里山には、ゴミの山、そこを格好の住みかとする、イノシシ、シカ、サル、ハクビシンに耐えられず、住民が、絶滅危惧種のトップにランクされる有様です。これに加えて、都市住民の多くが、この危機的状況を知らないという事実は、もっと深刻な事態といえるでしょう。

また、自然環境の劣化をも伴う土地利用に対しては、別の土地において、損失に相当する自然、生息環境の確保を義務付ける「里山バンキング」などの、欧米先進国に追いつく環境国家としての法制度の整備が求められています。

里山活動の活発化の中で、「里山」は「SAT OYAMA」として、国際的な用語となり、千葉県はそのメッカともなっています。一方では、「里山」という用語は、千葉県の事業名からは消えうせ、取り組み姿勢の矮小化が憂慮される事態ともなっています。

### 6. 里山の市民活動

リタイア後の人生と高齢化社会を見つめつつ、仕事の傍ら、近所の里山田畑での余暇活動は、健康の増進、地域コミュニティへのスムーズな仲間



ちば里山山カレッジ 講座風景

入り、気軽な社会奉仕活動として、打ってつけです。里山の管理は、樹木の育成作業であり、CO<sub>2</sub>の吸収、固定化を通して、大きくは地球温暖化への対応としての意味を持っています。里山活動はハードな、男の力仕事で、危険な作業との間違ったイメージを解き、地域の清掃や美化活動と同じく、地元意識の涵養により、地域コミュニティーの再生、活性化を期待する事ができます。「他人のために働くことが、自分に還ってくる」そんな活動が、「里山活動」なのです。

## 7. 気候変動と里山活動

人は、森から生まれた生き物と言われ、森は、人にとってなくてはならないものです。古代文明は、森林の消滅とともに、消えたといわれます。人の命は、森林の持つ多面的な機能なくしては存続できません。生き物は、他の生き物の食物となり、ハチは、植物の受粉に大きな役割を担って、他の命をつないでいます。人が、ひとりでは生きられないのと同じく、他の何百万というほかの命があつて初めて、人の持続可能性が保たれています。他の生き物が回りにいることが不可欠なのです。絶滅危惧種の半分が森林を生活の場としています。

地球温暖化の主因CO<sub>2</sub>の増大の原因は化石燃料が3/4、森林破壊が1/4を占めるといわれ、森林環境の整備は喫緊の課題です。

## 8. 日本の情勢

日本は、これまで、近代化は工業化であるとして、1960年代の丸太の輸入自由化以来、工業製品で稼いで、食料、木材は輸入すればよいという方向でしたが、その反省の時期がやってきました。

農林業は下等な産業であり、土にまつわる仕事は、低級なものとして、久しく認識されてきました。この結果、人口、仕事の都市集中、貧富の差の拡大、農林業従事者の不足を招くなど、その他沢山の社会的な不安定要因を創り出してしまいました。

人手の入らなくなった所には、野生動物が跋扈し、人を駆逐する例が、各地におきています。これらの状況は、非常に近い将来、日本のいたるところで、「普通の事」になってしまいそうです。

## 9. 「里山の復活」は「体験の復活」

日本人の弱体化の大きな原因に、知育偏重が挙げられ、この反省として、「体験」が見直されています。「遊び体験」も人格の形成に大きく影響し、想定外の事件の多発は、その結果とも言われます。里山での田舎体験、故郷体験は、子どもにとっても良い効果があります。

都市と、田舎の双方のニーズを、「里山」を介して、相互に交換する相補関係を築く事は、過度の分業化が地域の、社会全体に衰退をもたらす、市場経済優先、都市集中、農山村の崩壊を防ぐ手立てとなります。

## 10. これからの行動基準

林家は木材を生産して利益を得たい、一般の市民が望むものは環境保全などの公益的機能。政治や行政の役割は、目標を設定した上で、この相反する要求の合意を形成するにあります。

森林は公共性が高く、所有者のものではあっても、市民、国民は大いに関与すべき対象となっています。自然との共生を基本理念として、それぞれの地域の自然を活かし、それに沿った生き方を開発していく事が、住民と行政の役割です。

### かねおや ひろし 金親 博榮 プロフィール

1947年千葉県佐倉市生まれ。1970年早稲田大学を卒業後サラリーマンとなるが、1991年に会社を辞め、家業・農林業に就く。1992年谷当グリーンクラブを設立し、代表就任。2012年NPO法人ちば里山センターを設立し、理事長就任、現在に至る。